

Study of the Disaster Prevention Learning to Consider as Own Affairs: Focusing on “Kouroen Disaster Prevention Map” and “Kouroen Crossroad”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): Disaster, Disaster Prevention Education, Disaster Prevention learning, Disaster Preventing Map Crossroad, Self Participation 作成者: YAMAMOTO, Yukio メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4093

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「自分のこと」としてとらえる防災学習 —「香櫨園地区防災マップ」「香櫨園クロスロード」の取り組みを中心に—

児童学部 児童学科 山本 幸夫

要旨：地震、大雨等、我が国を襲う自然災害は後を絶たない。また、東南海・南海地震は、今後30年間に60%、50年間では80%の確率で来ると言われている。こんな状況の中、学校における防災教育は大丈夫なのだろうか。

本稿の目的は、具体的な防災学習の実践を分析し、その実践が「自分のこと」となっていることを明らかにし、今後の防災教育の一つの在り方を示すことにある。方法として、第一に、学校における防災教育の現状と課題を整理する。第二に、公立小学校の具体的な実践を分析する。第三に、その実践が「自分のこと」となっている要因を明らかにする。最後に、学校における今後の防災教育の在り方を考える。

キーワード：災害、防災教育、防災学習、防災マップ、クロスロード、自己関与

1. はじめに

2016年4月16日未明、マグニチュード7を越える地震が九州を襲った。近年では、1995年1月17日の阪神・淡路大震災、2011年3月11日の東日本大震災につぐ大きな地震である。戦後、わが国で起きた主な地震・津波を見ると1946年から2016年の71年間で24回の大きな地震・津波が発生している¹⁾。2000年から2016年の17年間に限れば、14回の大きな地震・津波が発生している²⁾。

一方、東南海・南海地震は、今後30年間で60%、50年間では80%の確率で来ると言われている。このような状況において、学校における防災教育はどうあればいいのか、どのような課題があり、今後どう取り組めばいいのか。

このような問題意識のもと、本稿の目的は、公立小学校の実践の分析を通して、それが「自分のこと」としての実践になっていることを明らかにするとともに、その要因を明らかにすることで、学校の今後の防災教育の一つの在り方を示すことにある。

手順は、次の通りである。

1. 学校における防災教育の現状と課題を整理する。
2. 公立小学校の防災学習の実践を分析する。
3. その実践が「自分のこと」としての実践となっている要因を明らかにする。
4. 今後の学校における防災教育の在り方について考える。

論述に先立って、本稿では、防災教育と防災学習

の2つの用語を使っている。1つの実践も学校サイドから見れば防災教育、児童サイドから見れば防災学習となる。よってこれらの用語を文脈に応じて使い分ける。

2. 学校における防災教育の現状と課題

(1) 学校における防災教育の位置付け

学校における防災教育は、学習指導要領の中では、安全教育の一部として位置付いている。小学校の教育課程では、道徳（第1.2学年）社会（第3.4学年）体育（第5.6学年）の各教科、特別活動や総合的な学習の時間などに位置付けられる。これらの中では、どのように取り扱うかは明記されておらず、実施形態は、学校や教師に任されている。実際には、消防法によって義務付けられている避難訓練は行われても、それ以外の防災教育を行っているところは少ない。

2008年、学校保健法が学校保健安全法と改正され、学校での安全教育が義務付けられるようになった。これを機に、防災教育への関心は高まってはいるが、具体的にどう進めていけばいいのか、模索の状況が続いていると言えよう。

(2) 有識者会議等のまとめ

東日本大震災の教訓を踏まえた、今後の防災教育の展開について、2011年9月の文科省の有識者会議（中間とりまとめ）は、「・・・（略）想定を超えた自然災害から児童生徒が主体性を持って自らの命を守り抜く、そのために行動するという態度を身に付けることが極めて重要である³⁾。」と指摘し、子どもの主

体性や状況に応じた判断力、行動力の育成を掲げている。また、2012年3月の中教審の「学校安全の推進に関する計画の策定について（答申）⁴⁾」でも、安全教育における主体的で的確な意思決定や行動選択、自律した危険の予測などが改めて強調されている。

主体性や判断力の育成の重要性については、2012年7月の有識者会議（最終報告）⁵⁾でも改めて述べられている。一方で「しかし、現在の学校教育においては、防災を含めた安全教育の時間数は限られており、主体的に行動する態度の育成には不十分であり、各学校において、関連する教科等での指導の時間が確保できるよう検討する必要がある⁶⁾。」と指摘されるように、学校現場は、防災教育の時間の確保が難しい状況となっている。

(3) 小中学校における防災教育の実態と課題

村越真、村松由岐（2014）は、静岡県の小中学校の児童生徒、教員を対象に防災教育の実態と課題を調査し、その結果を報告している。

そこには課題として「主体性と思考力を育てる防災教育のさらなる展開が必要であること、定型的な場面での訓練はできているものの、そうでない場面での訓練や自ら考えることを促す教育内容の実施は十分とは言えない状況であること⁷⁾」とあるように、（中間とりまとめ）や中教審の（答申）と共通の課題が指摘されている。児童生徒に、主体性、判断、意思決定、行動選択、危険予測などの力をどう育成していくのか、その具体的な実践が求められているのである。

3. 西宮市立香櫨園小学校の実践

西宮市立香櫨園小学校は、筆者が昨年まで勤務していた学校である。西宮市の西、芦屋市との境に位置する。海拔はおおよそ1.8メートル、学校の東には夙川が流れ、700メートル先には香櫨園浜が広がる。児童数は1000名を越え、市内でも有数の大規模校である。

(1) 香櫨園小学校の防災教育のはじまり

香櫨園小学校のある香櫨園地域は、21年前の阪神・淡路大震災で大きな被害を受けた。児童も6名亡くなっている。

何年もかかってやっとの思いで復興を遂げた住民にとって、2011年3月11日の東日本大震災は、大きなショックであった。地震とともに大きな津波が押し寄せ、一気に街を飲み込んだことへの衝撃である。地震のことは念頭にあったが、まさか一緒に津波が来るとは想定していなかったのである。地域と連携した香櫨園小学校の新たな防災教育はここから始まった。

(2) 香櫨園小学校の防災教育の取り組み

以上の経緯から、香櫨園小学校の防災教育は、津波と地震の2つを想定して考えられている。2012年から、現在まで継続して行われている主な取り組みは、次の通りである。

- ・「香櫨園地区防災マップ」の作成と改訂
- ・「香櫨園クロスロード ーあなたならどうするー」の作成と実践
- ・授業プラン「地震と津波」の作成と実践
- ・「命を守る本」の作成
- ・「香櫨園キッズ防災検定」の作成と実施

以下では、これらの中から「香櫨園地区防災マップ」「香櫨園クロスロード ーあなたならどうするー」の実践を分析する。

(3) 「香櫨園地区防災マップ」

図1は、「香櫨園地区防災マップ」の表紙である。まず、香櫨園小学校が取り組んだのは、避難する時に役立つ防災マップの作成であった。

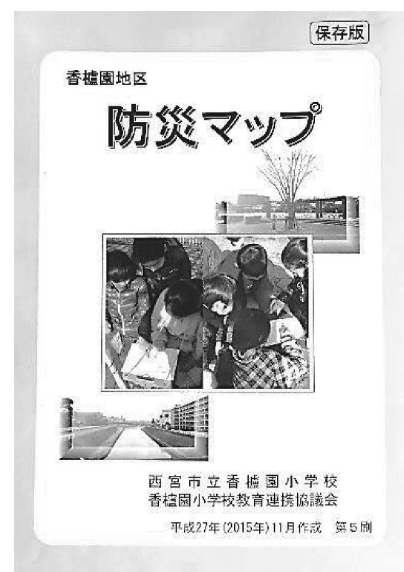


図1 防災マップ表紙

表紙にも書かれているように、この作成に関しては、学校と教育連携協議会⁸⁾がともに取り組んでいる。

防災マップには、海拔、津波発生時の避難経路、津波避難ビル、市の指定避難場所、防災倉庫、病院、AED設置場所、震災時の協力井戸などが記載されている。この中で、津波避難ビルの調査に4年生が関わっていることが大きな特色である。

4年社会科の内容である「地域社会の災害」と関連させ、「もしも」の時に避難できる4階建以上のビルの調査を行っている。調査地域を分担し、地域を歩き、

大人だけで作るのではなく、子どもたちも参加して作る防災マップ、そこには、今後、地震や津波が発生



図2 4年生が調査した4階建以上のビルの一部



図3 6年生がとらえた危険箇所の一部

神戸市は、阪神・淡路大震災で実際に起きたことをもとに、クロスロードを開発している¹⁰⁾。「香櫨園クロスロード」は、これをヒントにして作られたものである。図4は、その一例であるが、以下の3点で神戸市のものとは異なる特色を持っている。

香榎園クロスロード「あ」 (年 組 班)

強い地震がおこり、津波警報が出され、ＪＲ神戸線より北に向かつて避難することになりました。でも、お母さんと弟は買い物にでかけていて帰ってきていません。あなたは、お母さんと弟が帰って来たら避難しますか。それとも自分１人で先に避難しますか。

A 帰ってきてから B 自分１人で C その他

理 由

図4 香櫨園クロスロード

1つは、香櫨園地域に起こり得る問題を取り上げているということである。矢守克也・吉川肇子・網代剛(2005)は、クロスロードの今後の展望として「各地域が抱える防災上の課題に応じた「ローカル版」の作成¹¹⁾」をあげているが、まさに「香櫨園クロスロード」は、ローカル版とも言えるものである。

2つ目は、机上のゲームではなく、実際の避難訓練
 の中で行うということである。多くの場合、クロスロ
 ードは、シミュレーションゲームとして、机上で行われ
 る。しかし、「香櫨園クロスロード」は、「香櫨園地区

防災マップ」と併用して、実際の避難訓練の中で行なわれるところに特色がある。

「香櫨園クロスロード」は、4人一組となつて行われる¹²⁾。100を越えるグループが5分おきに、防災マップを持ち、避難場所をめざしていく。途中の3箇所で、その場で起こり得る問題が、クロスロードとして出される。問題は全部で9問用意されており、その中から、その場所に適したものが3問出されるようになっている。

図5は、1月17日、阪神・淡路大震災の発生した日の避難訓練で、クロスロードの問題に取り組む子どもたちである。実際に地域を歩きながら、そこで起こり得る課題を考える活動は、机上のゲームにはない臨場感があり、本気度が増すものとなる。



図5 クロスロードを考える子ども

3つ目は、選択肢が「YES」か「NO」の二者択一ではなく、もう1つ「その他」が設けられているということである。神戸市のクロスロードは「YES」か「NO」の二者択一であり、「その他」という選択肢は「香櫨園クロスロード」の大きな特色である。

矢守克也・吉川肇子・網代剛（2005）は、「繰り返し述べているように、クロスロードにおいては、イエスカノーかどちらか一方を正解として提示するわけではない¹³⁾。」と述べ、多様な意見や考え方があることを前提にした上で、神戸市のものは「YES」か「NO」の二者択一としている。しかし「香櫨園クロスロード」は、多様性を大切にする具体として、「その他」の選択肢をあえて設定している。このことは、小さいことのようにだが、学校教育においては、改めて見直されていることだと考える。なぜなら、学校や教師は、とかく「YES」か「NO」で白黒をはっきりさせる傾向があるからである。

苦野一徳（2013）は、二者択一のワナを取り上げ、

「極限状況におけるある行為が「正しいか、正しくないか？」などとたずねられると、思わず「正解はどちらだろうと考えてしまう傾向があるわけです。でも、実はまさにこれこそ、「問い方のマジック」にほかならないものなのです¹⁴⁾。」と指摘する。また、「わたしたちはこの問いに、絶対に正しい、あるいは絶対に正しくない、というふうに答えることなんて、実はできないはずなのです。身もふたもない話ですが、それははっきりいって「状況による」からです¹⁵⁾。」と述べ、「問い方のマジック」に陥らないように警告する。

「クロスロード」の問題は、まさにそういう問題、二者択一に適さない問題である。苦野が指摘するように、状況に応じて、最も納得のいく解を考える問題である。二者択一のワナに陥らないためにも、「その他」の項の設定には意味があると考えられる。

2016年1月17日に実施された「香櫨園クロスロード」の問題の1つからそのことを考察してみる。43グループが次の問題に取り組んでいる。

香櫨園クロスロード

地震による津波が、最短で15分でくるといわれる地域に住んでいます。地震が発生しました。さっそく避難を始めましたが、近所の一人暮らしのおばあさんが気になります。あなたは、おばあさんを見に行きますか、それとも行きませんか。

A 見に行く B 行かない C その他

この中で、ABCの割合は、以下の通りである。

A・・・・・・3グループ（7.0%）

B・・・・・・29グループ（67.4%）

C・・・・・・11グループ（25.6%）

Cの選択が25.6%と1/4を越えている。Cを選んだ理由は、次の通りである。

- ・時間があつたら、助けに行く。…………… 1人
- ・自分も大事だが、お年寄りも大事だから、自分ではなくお父さんお母さんに見に行ってもらふ。… 1人
- ・子どもではおばあさんを運べないし、どうにもできないから大人に頼む。…………… 1人
- ・子どもだけではリスクが大きい、また自分もまきこまれるから近くの大人に頼む。…………… 1人
- ・自分の身は自分で守る。だから自分はいかないが、大人に知らせて行ってもらふ。…………… 1人
- ・遠かったら、自分もまきこまれる。近くだったら行く。…………… 1人
- ・自分たちは北の山側に逃げるから、おばあさんの家が北側にあつたら見に行く。…………… 1人

- ・避難場所に行く途中にあるなら行くが、自分の家より南、海に近い方にあるなら行かない。…… 1人
- ・大人を呼んで見に行ってもらおう。大人がいなかったら自分で行く。…………… 1人
- ・おばあさんも助かってほしい。足の速い人が見に行く。…………… 1人
- ・見に行くと時間をとってまきぞいにされる。大声で津波が来ると叫ぶ。…………… 1人

(アンダーラインは筆者)

(もし・・・だったら)と条件付きで考えている子どもは5/11人、自分が助けるという直接の行動ではないが、他の方法で何とか助けたいと考えている子どもは6/11人となっている。

子どもたちは、自分の命を守ることを基本としながら、おばあさんも助かる方法が何かないか考えていることがわかる。「その他」の項目の設定が、方法の選択の幅をもたらし、自分は何ができるかという対応を考えさせることに働いている。

実際に「香櫨園クロスロード」に取り組んだ子どもたちは、どのような思いを持ったのだろうか。次は4年生の感想の一部である¹⁶⁾。

- ・クロスロードではみんなの意見が3つにわかれた。でも、みんなで意見を言い合って理由も言えば、なっとくしたり、なっとくしてもらえたりできた。人によっては、自分の意見になっとくして意見が変わらずにいる人もいる。その事を見ていると、人それぞれ考え方がちがいで、伝え方もちがうと思った。
- ・時間やひなんする場所によって、考え方が変わるからむずかしかった。
- ・意見がわかれて、どの意見にするかで生死がわかれると思うので、これは大切なことだと思います。また、機会があればやりたいです。クロスロードは時と場合によって、答えが変わるのでむずかしいです。
- ・クロスロードをしてみて、もしもなったら・・・のためにこのゲームをして得したなと思う。クロスロードをしていると中から、本当のことだと思いこんでいた。
- ・グループのともだちの意見を聞けてよかった。こういう場合は・・・いろいろな考えるのがむずかしかった。
- ・地震だけなのか、津波もくるのかじょうきょうによって変わるので、考えるのがむずかしかった。

(アンダーラインは筆者)

子どもたちは、状況によって判断が変わることの難しさを感じている。また、「途中から、ほんとうのこ

とだと思い込んでいた」とあるように、子どもたちがクロスロードの活動に、真剣に取り組んでいた様子が伺える。

このクロスロードの活動を教職員や保護者は、次のように見ている¹⁷⁾。

- ・子どもたちが、単なるウォークラリー？にならないか心配していたが、後の感想をみると、答えが1つではないクロスロードだったので、じっくり考えられたようだった。グループで行くことでの緊張感もあり、家で事前に避難経路を確認している子もいた。(教職員)
- ・クロスロードの課題をみんなで考えるという具体的な目的もあり、児童も意識をもって活動できよかった。ポイントでのクロスロードを終えた後も、歩きながらその話をつづけたり危険箇所の話をしながら回ったりしているグループもあった。(教職員)
- ・グループで一生懸命、クロスロードの問題について話し合っていた。グループ毎に地図を持っていたので、それも見て活用しているところが多かった。(保護者)
- ・クロスロードでも互いの考えをすり合わせる姿が生きて生きていた。状況を想像しながら、いろんな視点から考え判断しようとしており、見ていておもしろかった。(教職員)
- ・しっかり話し合っているグループが多かった。子どもたちが予想以上に真剣に考え行動する姿があった。子どもたちから「リアル感があった。」という声が聞かれた。(保護者)

(アンダーラインは筆者)

教職員や保護者の心配をよそに、子どもたちは想像以上の活動を展開していたことが伺える。

4. 「自分のこと」としての防災学習

以上「香櫨園地区防災マップ」「香櫨園クロスロード」の取り組みを見てきたが、これらの実践には、「他人事」ではなく「自分のこと」とするための考え方と具体的な手立てが講じられている。その要因を明らかにしていく。

1つ目は、徹底的な「地域」へのこだわりである。「香櫨園地区防災マップ」「香櫨園クロスロード」は、どちらも「地域」の課題からスタートしている。「Think Locally, Act Locally」である。防災教育は、地域の抱える課題を見つけ、それをコンテンツとして取り上げることが第一歩となるが、そのことを着実に実践している。

2つ目は、「行動」としての理解である。防災教育では普段「行動」していないこと以上のことはできないと言われる。知識と行動の一致が大切となる。「香榿園地区防災マップ」を「香榿園クロスロード」で使いながら、頭だけの理解ではなく、実際に地域を歩くことと一体化させている。

3つ目は、子どもの「自己関与」である。「香榿園地区防災マップ」の作成に見られるように、日々の学習とつなげながら、防災マップの作成そのものに、子どもを関わらせている。そのことで子どもの自己関与を高め、当事者性を強くしている。

4つ目は、「現実の状況に身を置く」ということである。防災教育では、意思決定、判断力を養うということが重要となる。そのためにはできるだけ、現実と近い状況に身を置くことが必要となる。「香榿園クロスロード」では、選択肢に「その他」を設定し、現実に近い状況で判断を求めようとしている。

5つ目は、教職員にとっての「自分のこと」である。「自分のこと」は、子どもたちだけのことではない。教職員にとっても「自分のこと」でなければならない。

香榿園小学校の取り組みは、「香榿園地区防災マップ」「香榿園クロスロード」また、授業プラン「地震と津波」や「香榿園キッズ防災検定」「命を守る本」など、どれをとっても教職員の手作りのものである。このことが子どもたちだけでなく、教職員にとっての当事者性を高めることになり、「自分のこと」という思いを強くしていると考えられる。

5. 今後の防災教育を考える

「自分のこと」としての防災学習は、言うはたやすいが、実践することは難しい。

河田恵昭(2010)は、「わが国の津波防災でもっとも大きな課題となっているのは、自助、共助、公助のどのレベルでも、津波と人びとの防災意識との距離が年々遠くなっていくことだろう。意識して自らの問題として捉えることが原点であろう¹⁸⁾。」と述べ、防災が「自分のこと」から離れていっていることへの危機感を表している。

防災教育では「正常化の偏見」ということがよく言われる。「正常化の偏見」とは、自分は大丈夫と一生懸命思い込もうとする心の作用である。

人間は、つらいことやいやなことから逃げようとする本性を持っている。自分にとってつらいことやいやなことは「他人事」として済ませたくなる。自分に都合のいいように考えたくなる。そういう心があること

を絶えず自戒しつつ、防災教育を進めていく必要がある。

山岡耕春(2016)は、南海トラフ地震について「今こうしている間にも、刻一刻と次の地震に向けて、プレート境界にかかる力は少しずつ増加している。その日は必ず来る¹⁹⁾。」と断言する。このことから目をそらさない防災教育が今、学校に求められている。

判断・行動のもととなる「包括的な知識」、状況に応じた「判断力」、行動を伴う「実践力」、学校・地域・保護者が協同して取り組む「一体性」、一年で終わらない「継続性」、地域の課題に向き合う「地域性」などを踏まえた防災教育の構築に取り組む必要がある。

香榿園小学校の取り組みは、「自分のこと」をキーワードとした今後の防災教育の一つの在り方を示している。

註

- 1) 「戦後の日本で起きたおもな地震・津波」『緊急復刻アサヒグラフ 九州・熊本大地震』朝日新聞出版 2016年5月 p. 55
- 2) 同上書
- 3) 文部科学省「東日本大震災を受けた防災教育・防災管理等に関する有識者会議」(中間とりまとめ) 2011年9月
- 4) 中央教育審議会「学校安全の推進に関する計画の策定について」(答申) 2012年3月
- 5) 文部科学省「東日本大震災を受けた防災教育・防災管理等に関する有識者会議」(最終報告) 2012年7月
- 6) 同上書
- 7) 村越真・村松由貴「静岡県の小中学校における防災教育の実態と課題」『教科開発学論集 第2号』2014年
- 8) この組織は、西宮市の全公立小中学校に設置されているもので、学校と家庭、地域が「共に子どもを育てる」という共通認識のもと、相互の連携・協力を図りながら学校づくりを推進することを目的としている。
- 9) 矢守克也・吉川肇子・網代剛『防災ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション』ナカニシ出版 2005年
- 10) 同上書
- 11) 同上書 P. 133
- 12) 2017年の「香榿園クロスロード」から、1年生から6年生までの異学年集団に編成し、実施してい

- る。
- 13) 矢守克也・吉川肇子・網代剛『防災ゲームで学ぶ
リスク・コミュニケーション』ナカニシ出版
2005年 P. 128
- 14) 苦野一徳『勉強するのは何のため?』日本評論社
2013年 P. 34
- 15) 同上書 P. 33
- 16) 2015年1月17日、「香櫨園クロスロード」を実施した後の4年生のアンケートの一部である。
- 17) 2013年1月17日、初めて「香櫨園クロスロード」を実施した後の教職員、保護者のアンケートの一部である。
- 18) 河田恵昭『津波災害』岩波新書 2010年 p. 165
- 19) 山岡耕春『南海トラフ地震』岩波新書 2016年 P. 13

Study of the Disaster Prevention Learning to Consider as Own Affairs: Focusing on “Kouroen Disaster Prevention Map” and “Kouroen Crossroad”

Faculty of Child Sciences, Department of Child Sciences
Yukio YAMAMOTO

Abstract

Our country has been suffered from a number of natural disasters like earthquakes, heavy rainfall and flood. Besides, disasters of Tonankai and Nankai Earthquakes said to occur at the rate of 60% for the next 30 years, 80% for the next 50 years. In this situation, is the present disaster prevention learning at schools in Japan effective for learners?

This paper proves that the practice of disaster prevention learning at schools is effective for learners to consider it as their own affairs. Also, it shows that this practice can be an aid for the next stage.

At first, this paper reviews the situation and tasks of present disaster prevention education. Second, it analyzes the concrete practice at public primary school. Third, it proves that the present practice of disaster prevention learning clarifies the learned factor as own affairs. Last, the author confirms what a disaster prevention education should be.

Keywords: Disaster, Disaster Prevention Education, Disaster Prevention learning, Disaster Preventing Map Crossroad, Self-Participation